

感覚環境のまちづくりシンポジウム（平成 20 年 12 月 9 日）

基調講演「感覚環境のまちづくりに向けて」

東京大学大学院工学系研究科教授 花木啓祐氏

ただ今、ご紹介いただきました花木でございます。とてもいい気持ちになったところで、実際のまちづくりの話をさせていただきます。

まず、なぜ今、「感覚環境のまちづくり」ということが言われてきたか、特に環境省が取り組むようになったのはなぜかということをお話しさせていただきます。ここに3つのことを書いています。どういうことが原因で、どういう背景で感覚環境のまちづくりということにますます力が入ってきたかということです。

最初に「問題対応型の環境対策からプロアクティブな環境政策へ」と書いていますが、問題対応型というのは、かつて日本にあった公害です。水質汚濁、大気汚染などが起きて、それに対応しなければいけないということが、長い間、環境行政の中心であった訳です。ところが、今やそういう時代ではありません。地球環境問題も非常に大きい問題ですが、これからは何が我々の将来にとって問題になるのだろうか。それは、地球環境問題かもしれないし、循環型社会かもしれない。さらに言うと、本日のテーマになるような生活の質に関するものであろうと。そういう将来を予測して、先回りをしていく政策が求められるようになってきた。これが背景としてございます。

2つ目は、我々が生活の質というものに対して非常に強い関心を抱くようになった。単に、衣食住足りているということではなく、文化的な生活をしたい、あるいは人間として意味がある生き方をしたい、あるいは自分の子供・孫が幸せになってほしい、色々な願いが我々にはある訳ですけれども、その思いが非常に強くなってきた。そうなりますと、単に水質汚濁、大気汚染にとどまらない、もっとまちとして望ましいものは何なんだろうか、そこで我々が生きていくときには何が必要かということを考えるようになってきた。こういう世の中の動きがあります。これが2つ目です。

そして3つ目ですが、本日は「感覚環境のまちづくり」をテーマにしております。単に感覚環境が大事だということではなくて、それをまちづくりに活かしていく。その裏には、そもそもまちづくりというのは、大勢の人が参加していくものだということがあります。これは、都市計画の仕組みが約 10 数年前に変わった訳ですが、今は

ボトムアップでみんな物事を決めていく、そういうまちづくりが、このような生活の質を高くするための環境政策を実行に移すのにうまく合うのではないかということ、今、感覚環境のまちづくりが考えられるようになったわけであり、うまくいくのではないかと言ったのは、実はまだわからないからなのですが、これは試みる価値があるだろうということで、本日私もここに参った訳であります。

世界を見ると様々な国がございます。発展途上国から先進国、さらには先進国の先、どこに行けばいいのかということを考えている国、ここには日本も入りますが、そういう様々な国がある。それぞれの国の状況に応じて人々が求める生活の質というのは違います。発展途上国の場合には、十分な衛生・安全・教育がない。まず、学校を作ろう、まず病院を作ろう、まずちゃんとした家を作ろうと、それがまず課題になりますね。

けれども、現在、多くの国は、発展途上国を過ぎて工業国の方に移ってきている。これは、インド・中国、あるいはもうちょっと先に行っているところではタイあたりがありますが、そういうところでは物の豊かさをどうしてもみんな目指す。車が欲しい、カラーテレビが欲しい、広い家に住みたい、そういう利便性を求めるのがこの段階です。

ところが、こういう時代には、かつて存在していた精神的な豊かさ、あるいは歴史・文化が失われることが、残念ながら多いのです。日本もそうでしたね。昭和30年代、40年代に、かつての日本のいいものがどんどん失われていった。だけど、やがて人々は気づく。それがこの段階ですが、先進国にあつて、これから精神的な豊かさ、文化・歴史をもっと豊かなものにしていこうと。単純に復活させるだけではなくて、新しい形の豊かさをつくっていこうという時代になってきた。これが先進国の先です。

我々はどこに行くのか。先進国の定義というのは、1人当たりのGDPで決まる訳ですが、当然それが目標ではない。我々が目指す道というのは、生活の質として、もちろんある程度の衛生・安全・教育・物質的豊かさはなければいけないけれども、精神的な豊かさをもっと膨らませたい。さらに、環境で言いますと、環境に配慮した生活をするのが豊かさをつくるということです。

かつては、環境への配慮は十分にはなかったわけですが、現在、我々の多くが感じているように、我々の生活自身が環境に悪い影響を与えるとすれば、我々は幸せではない。我々の日々の行動、あるいは様々な行動が環境に与える負荷が小さいとすると、

それでもって我々は満足するようになってきた。だんだん日本もそういうふうになってきたと、これが先進国の後の目指す姿であると思っております。

これらをこの発展途上国からポスト先進国まで比べまして、環境へのインパクト、環境にどういう影響を与えるかということを見ていくと、ずっと先進国に至るまでは環境への負荷が増えてきた。これは、地球温暖化問題に現れていますよね。どんどんエネルギー消費量が増えてきた。けれども、やっとこれが下がるようになってきた。環境への負荷が下がって、それがかえって満足につながり、また人々の生活を豊かにする、それが可能になる、そういう兆しが日本でも見えてきています。これが基本的な状況です。

では、人々の考え方は変わっているのかということですが、これは内閣府が行っている調査の結果です。

自然保護についてどう考えるのかを 1986 年から 2006 年まで比べてみます。この青いバーは「自然は人間が生活していくために最も大事なのだ」という意識をお持ちの方の割合、そして赤い方は、「自然は大事だけれども、人間社会との調和を図りながら自然の保護を進めていく」という意識の方、我々がかつてこう思っていたわけですね。自然は大事だ、しかし、人間も大事なのでうまく調和しよう。今でも、私はそうだろうと思っている訳ですが、人々の意識の変化はもっと早く、今や青い方が多数派になりつつある。自然と人間社会とを調和するのではなくて、自然を守ることが人間にとっても一番大事なんだという考え方が増えている訳ですね。

特に、この青いこのバーは、若い世代や女性で特に大きい。どんどんこちらの方に変わってきているということですね。それは、先ほどのスライドで言うと、もう環境配慮優先のステージに入っていると言える訳です。

もう一つ、こんなグラフがあります。これは 1970 年からですから、高度経済成長の終わりに近い頃から現在まで、我々の生活はどうすべきかということの内閣府が聞いているものです。

物質面・精神面について、何を大事にするのかという質問です。こちらはやや保守的で、まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きを置きたい。ちゃんと住宅を作って、車に乗ってという考えがある一方で、物質的にはある程度豊かになったのでこれからは、心の豊かさやゆとりのある生活をするために重きを置きたいという考えがあります。心を重視する考えがどんどん増えて、今や 2 対 1 ですね。この考えの

人が物質重視の人の2倍いる、それが今の状況です。

つまり、その中での環境・まちづくりをどう考えていくかというのは、昔とは違うということです。当時は、大気汚染を防ぐ、水質汚濁を防ぐ、それと物を作るのとどう調和するかということであった訳ですが、今や精神的豊さ重視がはるかに多い。すなわち、大勢の人を満足させようとする、感覚環境を満足させなくてはならないという状況になっている訳です。

それをもう少し具体的な項目で言いますと、かつての悪臭からよりよい香りへ、これは本日最初に表彰があったところですが、騒音からよい音へ、光の害からよい光へ、これは先ほどご発表がございました。そして、ヒートアイランドが生じている都会から風・緑をどう活用していくのかと、そういう方向に変えていこうというのが、今、目指されている環境・質の変化ということです。

次のスライドですが、私は水について長い間研究してきておりますので、水の例を持ってきました。

水質についての古典的な指標は、生物化学的酸素要求量（BOD）というものですが、そういうような指標では、水質がよくなっているかどうかということを見ることはできますが、人々が満足するかどうかというのは測れません。

これは一つの例ですが、五つの面で水環境、水辺がどれぐらい良いか、人々がそれになじめるかということを示しています。快適な水辺、地域とのつながり、これなどは、環境というよりは社会的なつながりですが、もはや環境の中に入ってきている。そして、自然な姿、豊かな生物、水が使えるかどうか。水質がいいか悪いかというのは、今やもうそれだけでは一つの側面しかあらわさず、全体を見なければいけない。すなわち、感覚として我々が目で見、また音で楽しむ、あるいは雰囲気、風を楽しむもの全体が大事だということになってきているわけです。

その中で重要になってくるのは、先ほどの生活の質のスライドにもあるような、歴史的な要素、文化的要素と、我々がこれから作っていかうとしている環境をどうつなげていくか、地域の固有の歴史・文化にふさわしい香り・音・光・雰囲気をどう作るかです。京都のようなところはいいのですが、普通のまちはどうすればいいのかというのが、まちづくりを実際に広げていくときに問題になるんですね。我がまちは余り歴史も文化もないぞというところをどうするか、これはこれからの課題だと思います。

それから、ハード系インフラというのは、道路やトンネルなどですが、それをうま

く使うことによって価値を生み出していかうとか、水辺をうまく使うとか、モニュメントとして様々な物を使うということが行われようとしています。従来のようにただ物を作り続けるというのでは変わっていかないのです、このような価値を生み出すようにインフラを使うことを、建物や道路を造るところにどうやってフィードバックしていくかがこれからの課題になってくる訳です。

さて、ここからは、感覚環境の課題としては何があるかということの話をしたと思うのですが、ここに3つ書きました。

1つは、どうやって定量化、あるいは一般化するのか。例えば、石井先生がいいと思われる、その感覚をどうやって他の人もわかるように一般化するのか、そういうことです。

それから、個人差の考え方。かつての環境の大気汚染・水質汚濁というのは、個人差ではなくて指標で測っていたので差はないのですが、感覚環境は人によって当然差がある。それをどうやって考えていくのか、どうやって組み込むのか、これはかなり難しい問題だと思います。

そして、多様性の維持です。色々なまちで感覚環境のまちづくりを行う訳ですが、当然みんな違うまちであってほしい、その多様性を維持するということと、この一般化とのバランスをどうやってとるのか、これも難しいと思います。今はまだ感覚環境のまちづくりというのはスタートにあるのでいいのですが、下手すると、どのまちに行ってもみんな同じ工夫がされていて、かえって特徴がなくなるということになってしまっは元も子もないので、ここが鍵になってくる。

本日お配りしている資料にも、「定量化・一般化」について幾つか書いてございますので、また後でご覧いただきたいと思っております。

さて、ここに課題がまだ続く訳ですが、「多様な感覚環境の満足」と書いています。人によって好みが当然違う、何をいいと思うかが違う。そのために、まちづくりには難しい点があります。

嗜好品ならいいんです。全員が気に入るものでもなくていい。一部の人たちがこの物を気に入れば、その人たちのために売り、別のグループには別の物を売ればいい。それは、物を売るときの戦略で言われる多品種少量生産ですが、みんなにというよりターゲットを決めて売っていく。

物はそれでいいのですが、まちづくりは難しい。まだ自分の家ならいい。すごく特

殊な格好の家でも、その人が気に入ればそこに住めばいい、気に入らない人は住まなくていい訳です。

ところが、公共の部分、道路、あるいは町並みになると、そうはいかないですね。気に入らない人もそこに住む訳なので、そこをどう折り合いをつけるかが難しい。

みんなが文句は言わないものを優先すると、平凡なものになってしまう。特徴を出すというところが非常に難しいということです。住民と一口に言っても、非常に多様な人がいる。また、一度まちをつくると、30年、50年、100年変わらないということがありますので、余り下手なことはできないなどとなると、だんだん保守的になって工夫が活かない訳ですが、ここに何とか感覚環境を入れていきたいというのがこれからの課題です。

では、どういう考え方があるだろうかと言いますと、1つ目は、平均的に各住民の満足度を充足する。色々な人がいて、色々な意見があるんだけど、多数決をとって決めていく。これは、まちづくりをするときに協議会を作って個別の様々な設計を住民が議論しながら決めていくということがありますけれども、文句が出ないような形にするというのが1つあり得る。ここにどうやって感覚環境を入れていくかというのもまた大きい課題ではありますが、これは無難なやり方。

もう1つは、ある住民層の満足度を特に重視する。例えば、あるまちがあって、非常に歴史的な背景がある。その歴史の背景をまちづくりの随所、随所に入れていく。それは必ずしも全員がそれを好むかどうかはわからないけれども、少なくともそのまちの歴史に誇りを持っている人にとっては満足度がすごく高いですよ、極めて高い満足度。

しかし、お金を全部そこに投ずるとなると、またハッピーでない人も出てくるので、すべての住民層にある程度の満足度は保障しながら、けれどもまちの特徴を活かしていく。

例えば、関東近辺で言うと、鎌倉などは歴史を非常に重視したことをやっていますが、その歴史のところだけにすべての資産を投ずる訳ではなく、そこに住んでいる人の満足度も活かしている。その辺のメリハリをどうつけていくかということがこれからの課題になってくると思います。

では、当面は何をやる必要があるかということですが、まず「Good Practice」と書いていますが、うまくいっている例をまず発掘するということです。いろいろな工

夫がされているけれども、それは我々は知らない。

うまくいっている例というのは、2つの場合があると私は思うのです。1つは、従来はなかったような、感覚環境の面での新しいまちづくり、そしてもう1つは、感覚環境の面では新しくないかもしれないけれども、それを人々が参加型で行っているというプロセス自身に価値があるもの。こういうものを発掘していこうということが、これからのいい例をつくるのに役立つだろうと思っています。

一方で、学術的な根拠、すなわち感覚環境のまちづくりというものを研究としてどうとらえるかということもやっていかなければいけないと思っています。その第1は、感覚環境の定量化、例えば、心地のいい香り、音、光というものを経済的価値にどうやって置き換えていくのかということです。第2には、まちづくりとしての効果、これはこのすぐ後にもつながってきますが、公共事業を行うときには費用便益分析をやるのが義務づけられている。どれだけのお金をかけてどういういいことがあったかをどうやって評価するのか。

様子を見て「これはいいね」と専門家が言うだけではなく、税金を払っている人が納得する評価というものも示していかないと、現実の公共事業としてはうまくいかない。あるいは、公共でなく、開発事業者がやるとしても、みんなが納得できるよう、このあたりを定量化していく。公共事業の場合には、特にこの便益を見ていくというところが大事になってくるということです。

本日はこの後、幾つかの感覚環境についての具体的な話があり、また「Good Practice」の例についてもご紹介いただけたと思いますが、まだこの感覚環境のまちづくりというのは始まったばかりですので、これからの発展を期待して私のこの講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。